

平成 29 年度埼玉県オハイオ州スカラシップ
機械工学インターンシップコース
「厳しさ」と「伸びやかさ」 / 恐ろしい「If」

「厳しさ」と「伸びやかさ」

こちらでの生活も 1 か月半過ぎました。私のスカラシップのプログラムは先月紹介したように、1 週間の内、週 2 回のインターンシップ、週 3 回の大学での講義に挑戦するものです。大学に行きながら同時に会社にも努めている留学生は滅多にいません。このプログラムに挑戦しているからこそ気が付いた面白いことがあります。それは会社の「厳しさ」と大学の「伸びやかさ」という 2 つのキーワードです。会社は私が留学する前に想像していた以上に厳しい所で、大学では学生に一定の「伸びやかさ」が与えられています。今月は顕著にそれらを 2 つ感じることができました。

1 つ目は、会社では自らで仕事を探さなければいけないということです。私達のプロジェクトは 1 つの部品の加工時間を短縮するために、マシニングセンター内部の切削工程を GoPro という小型カメラを用いて記録し、無駄な工程を除き短時間でより多くの部品を製作することです。先月のレポートでお伝えしたとおり、私達が GoPro を壊してしまったため、仕事を進められない日が続き、会社に行っても上司からの指示を待つだけの時間が増えていきました。しかし上司をはじめ、エンジニアの方は自身の仕事をこなすために会社に来ています。従って指示を待っている状態は事実上、何もしていないのと同じでした。

それに対して大学では学位を取得しなければいけません。そのための課題を教諭から受動的に受け取ることが出来ます。それは教諭の仕事が学生の学力を伸ばすことだからです。

2 つ目は、会社での英語が聞き取りにくいということです。エンジニアの方が私に技術的指導をする場合、私の英語能力を考慮して話す事はありません。アメリカ人同士で会話するスピードと同じスピードで指導を受けるので、時には全く会話内容が理解できないことがあります。

一方で大学での英語は会社の英語に比べると聞き取りやすいです。それは私の所属している IELP プログラムが英語を母国語としていない方を対象にしていることが要因しています。教諭をはじめ、ELL センターのチューターの皆さんは私のレベルに合わせた会話を展開してくれます。

そして 3 つ目は、会社では責任を取らなければいけないということです。私は GoPro を壊したことによって始末書を書かなければいけませんでした。それは、破損に至った原因や今後のプロジェクトの進め方についての改善案です。始末書を上司に報告し、もう一度 GoPro を買って欲しいとお願いしました。大

学では講義中どんな失敗をしても責任を取らされることはありません。

会社の「厳しさ」と大学の「伸びやかさ」を同時に経験していることでそれぞれの目指す目標の違いに気が付きました。会社の目標は利益を多く上げることです。あらかじめ決められた売り上げ目標があり、エンジニアの方はその目標に向かって仕事をしています。私自身も会社の売り上げに貢献できるようにプロジェクトを進めなければいけないため、この能動的な社会に厳しさを感じました。

対して大学の目標は学生の能力を向上させることです。学生が学位を得る（能力が向上する）ため、教諭は学生の能力に合わせた課題を与え、能力を引き上げていきます。この受動的な社会に伸びやかさを感じました。（右の図：講義中も



クラスメートの Walaa さん

楽しく学んでいます。）伸びやかさがあることで学生は多くの物事に挑戦する機会を得ることが出来ます。遊びから学ぶことも多くあり、それら一つ一つが学生の能力を向上させていく糧になっているのだと考えます。

現在、会社では自身のプロジェクトを成功させる為に、パートナーの浅海さんと共に知恵を絞り緊張感を持って仕事をしています。フィンドレー大学では日本では出来なかった体験に、思いっきり羽を伸ばして挑戦しています。会社の「厳しさ」、大学の「伸びやかさ」どちらも楽しんでいます。

恐ろしい「if」

9月中旬、会社に新しいGoProを買って頂けたため、私たちのプロジェクトは再開しました。

早速、部品を加工するサイクルタイムが遅いマシニングセンタの解析に取り組もうとしたのですが、その前に上司の Brian さんから真顔で「もし（IF）次も GoPro を壊したら、日本に帰ってもらう」と注意を受けました。その後すぐに冗談だと言われたのですが、あの時の顔や目、声のトーン等は絶対に冗談ではないと確信しました。アメリカ人の方に怒られることは本当に恐ろしかったです。これまで学校という社会しか経験してこなかった私にとって、学校と会社という社会の違いについて学べた良い機会でした。

私たちのプロジェクトは、「マシニングセンタの作業の効率化」です。記録したサイクルタイムを解析し、部品を加工する時間を短縮させ、マシニングセンタの作業手順の効率化を図ります。そのため、解析した結果から見てきた非

効率的な動作やサイクルタイムを短縮できる可能性のある動きを上司に提案しています。

今月は実際にマシニングセンタ内に GoPro を配置する際に、前回の失敗を生かすため工夫をするようにしました。まず、マシニングセンタ内のドリルの可動範囲をあらかじめ把握し、GoPro をドリルの可動範囲外の場所に取り付ける予定を立てます。更に GoPro を付けた状態でマシニングセンタを運転させる前に、GoPro に見立てたお菓子を取り付け、試運転をします。そして取り付ける予定の場所の安全が確認できた後に、実際に GoPro を取り付け、部品の加工の様子を記録します。

今月は 1 台のマシニングセンタのサイクルタイムの記録をすることが出来ました。マシニングセンタのサイクルタイムの改善は会社にとって大きなメリットになると信じています。そのため来月は、改善してほしいマシニングセンタの台数を教えてもらい、どのくらいのペースで仕事をしていけばいいのかを計画しながらインターンシップに取り組むべきだと考えています。



GoPro の取り付け位置を確認